「ルネサンスのパトロン」

増山雄三

「ルネサンス」とは、ギリシャの宗教用語を語源とするフランス語で、「再生」を意味する言葉だが、日本では「文芸復興」と訳される事が多く、それは、この文化運動が、ギリシャやローマ文化の、いわゆる古典古代の文化を、復興させるという面があったからであって、要約すれば、「ギリシャやローマの古典文化を再生する」という事ができる。

つまり、十四世紀のイタリアに始まり、十六世紀まで続いた、ヨーロッパの文化芸術上の動きだが、それに、本格化する大航海時代や宗教改革とも、密接に関係しながら、主権国家を形成する近代社会の成立を、準備した動きでもあったのである。

それでも、ルネサンスの意義には様々な論議があるが、一般的な見方は、ゲルマン民族

という、蛮族の進入によりもたらされた封建社会と、神を絶対視する、ローマ教皇が支配する暗黒社会から、人々を解放しようとする運動だった、とするものが主流になった。

こうしてルネサンスは、十五世紀のイタリア商都のフィレンツェを舞台にした、文芸文化運動であるが、当時のイタリアは、ペストに再三見舞われ人口が激減したが、共和制の都市国家では、それが、新興富裕層や消費の拡大にも繋がっていった。

それに、メディチ家などのエリート層のパトロンたちは、富と権力の誇示や、教会への奉仕のため芸術作品を活用する一方、十六世紀前後には、舞台はローマに移り、教皇たちがパトロンになったこともあり、近年は西洋美術史の研究で、神経科学分野との協働が進み、著名な作者の理解がより深まっている。

それで、東京上野にある東京都美術館で開かれた、「THE GREATS 美の巨匠たち」展でも、英国スコットランド美術館所

蔵の、ラファエロの素描「『魚の聖母』のための習作」は、注目の作品だ。

ルネサンスは、織物業や金融業で栄えた、十五世紀のフィレンツェを舞台に、人文主義と古代ギリシャとローマの芸術文化の再生を求めたと前述したが、ラファエロやレオナルド・ダ・ヴィンチにミケランジェロらの、巨匠が活躍した、黄金時代でもあった。

しかし近年では、当時の社会情勢や多様なパトロンの存在を重視し、より社会史的な見地から時代を読み解く傾向が強く、例えば、十四世紀に西欧を襲ったペスト、つまり黒死病の強い影響などもある。

英国の歴史学者アリソン・ブラウンは、著書の「イタリア・ルネサンスの世界」で、一三四八年のペストの大流行は、イタリアの人口を半減させたが、一方、生存者には財産相続や賃金増加の富をもたらし、その後の消費活動が、促進された事を指摘する。

そして、フィレンツェもペストの猛威にさ

らされ、イタリア美術史が専門の、成城大教授石鍋さんの著書「フィレンツェの世紀」によると、十四世紀初めには、十～十二万人だった街の人口が、十五世紀には四万人弱と、三分の一程度まで激減したという。

それで、都市国家のフィレンツェでは、大商人で銀行家のメディチ家を中心に、名家出身のエリート層による寡頭政治が行われ、織物業や職人の街で、パトロンとして芸術家に仕事を与え、その権利を誇示する様に、偉大な名作を作らせ、教会等の大建築も造った。

十四世紀初めのアビニョン捕囚と、それに続く教会の大分裂のため、ローマは長く本来の形で教皇が不在となり、十五世紀初めの街は、教会も崩れ落ちほど荒廃していたが、本格的にバチカンに帰還した教皇の、最大の課題は、ローマの統治問題だった。

石鍋さんは、近著である「教皇たちのローマ」で、特に、一四四七～一五五五年にバチカンを治めた、ニコラス五世からユリウス三

世まで、名家に推された、十四人の「ルネサンス教皇」に注目している。

それは、教皇たちはフィレンツェを始め、イタリア各地から芸術家を集め、教皇庁は欧州各地に通じる情報センターであり、ルネサンス美術はローマで国際化したというが、ただ、その多くはカトリックの指導者というより、教皇国家の君主という側面が強かった。

というのは、彼らは説教もせず、血縁者を要職に置くという「縁故主義者」という、世俗的な人物ばかりだったが、それでも、彼らが居なければ、きっと傑作は生まれなかっただろう、と石鍋さんは指摘する。

特に、現在のサン・ピエトロ大聖堂を建設し、ミケランジェロにシスティーナ礼拝堂の天井画を描かせ、さらに、ラファエロには宮殿の壁画描かせた、在位一五〇三～一三年のユリウス二世と、ラファエロを擁護した、在位一五一三～二一年のレオ十世は有名で、ラファエロの作品はライモンディが複製版画

を作り、欧州各地に広まった。

石鍋さんは、「ユリウス二世は古代ローマへのエキゾシチズムを持ち、アートのスケールを変えた人物で、レオ十世はラファエロとともに、欧州の近代美術への道を開いた。だから、教皇たちの個性がなければ、皆が納得できる芸術も生まれなかった」と説明する。

その後ローマは、フランスとハプスブルグ家の神聖ローマ帝国が、覇権を争ったイタリア戦争の舞台となり、神聖ローマ皇帝のカール五世による、一五二七年のローマ劫掠によって、市内は多くの教会や美術品が破壊と掠奪の憂き目に遭い、再び荒廃したが、それでも、ローマはバロック芸術で再興して、疫病や戦争の危機は、新たな芸術文化を生むという、土壌を作りだしていたのである。

ところで、近年になって、西洋美術史の研究で、科学のメスが入る機会が増えてきていて、小佐野東大名誉教授は、新著の「絵画は眼でなく脳で見る」で、ダ・ヴィンチなどの

手稿等を例にして、**神経科学**の視点から、作者の意図などを分析している。

それで、左利きのダ・ヴィンチは、鏡に映して読むという、いわゆる「**鏡文字**」を手稿に記していて、小佐野氏は右利きと左利きの人が、普通文字と鏡文字を書いた際の、脳内の反応を調べた研究論文を紹介し、ダ・ヴィンチが右手で筆記できても、左手で鏡文字を書く方が、より速く書けたと推測している。

というのは、ダ・ヴィンチが、公証人の庶子境遇だったので、普通文字を書かなかったのだ、などとも言われるが、鏡文字というのは、頭に浮かんだ着想を、一番速くかつ正確に、書記する方法だったからだ。

また、小佐野氏は、活版印刷が発達した十五世紀は、**視覚の時代**で、遠近法で描かれた絵画を見た人が、平面に空間を求めていたように、脳神経に、新しい回路や仕組が培われていったのだろう、とも解説している。

令和四年六月